

## 専任教員コラム

大学院法務研究科教員に、学問に限らず、最近の話題や感じたことなど、自由なテーマでお書きいただけます。



うえの たつひろ  
上野 達弘 教授

**主な研究テーマ：**著作権法における権利間調整

**主な経歴・在外研究：**マックスプランク知的財産研究所(ミュンヘン)、著作権法学会理事、工業所有権法学会理事、法とコンピュータ学会理事、文化審議会著作権分科会専門委員

**主な著書・論文等：**『著作権法入門』(有斐閣、共著)、『特許法入門』(有斐閣、共著)、『出版をめぐる法的課題』(日本評論社、共編)、『年報知的財産法2014』(日本評論社、共編)ほか

**担当科目：**著作権法・知的財産法特別演習・著作権等紛争処理法(法務研究科)、知的財産権法研究(法学研究科)、知的財産法(法学部)ほか

## プラモデル

「またやってしまった……」。

学者をやっていると、複数の原稿を抱え、そのいくつかはメ切を超過し、ときには大幅な遅滞に陥っている、そんな事態は珍しくない。恐ろしいのは、そんな渦中にありながら、新たな執筆依頼が来ると、つい引き受けてしまうことである。その結果、当然のことながら、多重的な債務不履行状態に陥る。昨今のギリシアではないが、いわばデフォルトである。

しかし不思議なことに、そのような窮地に喘ぐ学者に接しても、悲壮感が感じられないことが多い。「いやあ、メ切とっくに過ぎていのに、一文字も書いてない」などとボヤいている姿は、どことなく楽しそうにさえ見えるかも知れない。それは、本人がギリシア人に似たメンタリティだからではなく、また、出版社や編集者を困らせて楽しんでいるわけではもちろんなく、やはり自分の“作品”を書いて発表するのが好きだからだろう。

昼夜を問わず、また曜日にかかわらず原稿執筆に勤しむ学者は多い。私も、(その是非はともかく)8号館に最も長時間暮らしている一人である。「え？今から研究室に戻るんですか？」とか「日曜の朝8時から研究室にいるんですか？」と驚かれることも少なくない。私はそのようなとき、「まあそれは深夜に帰宅したサラリーマンが、難解なプラモデルを組み立てたり、模型を塗装したりしているのと同じですよ」などと説明している。好きなことであり、しかも成果を他人から評価されるとなれば疲れなし、むしろ「明日は朝早いから今夜はもう寝なければ」とか、「明日は休日だからやっとな続きを作れるなあ」などと思うものである。

ただ、好きなことであれば無条件に楽しいかというとそうでもない。こんな話がある。映画の世界がたまらなく好きで、とにかく映画に関わる仕事がしたいと考えてスタッフの一人になったものの、撮影

はいつも深夜に及び、27時(午前3時)になっても、「撮り直し！」という監督の声が響く。まだ帰れないのかと落胆すると共に、この時間になっても疲れの色を見せない監督の気力と体力が信じられない。そう思った本人が数十年後に監督になったとき、27時になっても「撮り直し！」と叫んでいたというのだ。

つまり、仕事の内容が好きなことや、成果を他人から評価されることも重要だが、やるかどうかを自分が決定できるかどうかということもかなり大きいのだ。大好きなプラモデル作りも、人にやらされるなら楽しめないはずだし、逆に、人にやらされたら苦役に他ならない肉体労働も、自分でやると決めたボランティア活動なら苦痛でない。どんな仕事であれ、それを人生の一部として楽しむためには、主体的な自己決定が重要なのだろう。

学者というのは、原稿執筆や講演など、やるかどうか自分で決定できることの多い仕事だ。ただ、自分で決定できるために、つい無計画かつ無責任に仕事を引き受けてしまいがちである。かくいう私も、複数の未完成原稿に頭を抱え、かといって適当なところで脱稿することもできないままデフォルト寸前であるにもかかわらず、新たに興味ある依頼が来ると、どう考えても無理だと承知しながら、つい引き受けてしまうことが少なくない。これではだめだ。今後は限られたリソースをわきまえて、きちんと仕事をコントロールしなければ、と自分に言い聞かせたはずの矢先、本コラムの執筆依頼メールが届いた。海外出張中を口実に返事を先延ばしにしていたが、帰国翌日に執筆依頼書を手待つK女史の笑顔に引き受けてしまった後、私の口から出たのが冒頭の言葉である。

「またこんなプラモデル買ってきたの!? まだ完成してない模型が3つもあるじゃないの!」と叱られる子供…そんな心境である。誰か助けて!